

Title	西周による統一科学の試み
Sub Title	Nishi Amane's attempt at unified science
Author	小泉, 仰(Koizumi, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1969
Jtitle	哲學 No.54 (1969. 11) ,p.81- 115
JaLC DOI	
Abstract	I have tried in this paper to clarify Nishi Amane's attempt at unified science in the early Meiji Era. The article consists of four parts : 1) Nishi's cultural background for unified science ; 2) Nishi's attempt at unified science in the "Hyakuichishinron ;" 3) Nishi's attempt at unified science in the "Hyakugakurenkan;" 4) Nishi's attempt at unified science in the "Seiseihatsuun." In the first part, we deal with Nishi's cultural background before he was confronted with European philosophy. We find that Nishi's studies of Chu Hsi's and Ogyu Sorai's philosophy, together with his medical training, provided the appropriate foundations for his unified science. In the second part, we concern Nishi's attempt at unified science in the "Hyakuichishinron (1866-67)" and find confucianistic influences in his attempt, together with Auguste Comte's and J. SMill's. In the third part, we discuss his attempt at unified science in the "Hyakugakurenkan (1870)" and deal with his principles on which he tried to build up his system of unified science. In the fourth part, we examine his attempt to bridge over the gap between physiology and psychology in the "Seiseihatsuun (1871-73)." This gap was considered to be an insurmountable one between mental and physical sciences in those days. We discuss Nishi's attempt at construction of a bridge over this gap and deal with his frustration in this attempt.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000054-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西周による統一科学の試み

小 泉 仰

西周は、日本において初めて統一科学を試みた人である。この小論においてわたくしは、かれの統一科学の試みを明らかにしたいと思う。このために、わたくしは、第一節「統一科学の土壌」において西の統一科学の構想がかれの若いころに学んだ医学研究や徂徠学研究を通してどのように準備されていくかを取り扱うであろう。つまり、第一節では西の統一科学の素地となる土壌が検討される。つぎに第二節「統一科学の構想 (1)——『百一新論』の試み——」では、西がはじめて統一科学の試みを行なおうとした慶応四年ころの『百一新論』を取り扱うであろう。ここではまだ十分に統一科学の構想は成熟していない。しかしあるていどの統一科学の原理のデッサンが立てられている。第三節「統一科学の構想 (2)——『百学連環』の試み——」では、西が明治三年の『百学連環』のなかで展開しようとした統一科学の試みが検討される。とくに西がハミルトン、コント、ミルの思想をどのようにうけ入れていくかに焦点が合わされるであろう。そして第四節「統一科学の構想 (3)——『生性発蘊の試み』——」では、西が物理と心理のみぞを乗り越えようと努力した『生性発蘊』の試みとその挫折を中心に考えていくことにしよう。

1. 統一科学の土壌

さて、西の統一科学の発想は、かれが十代後半に志した医学研究の経験がその準備的な下地をなしていたと考えることができる。というのは、西が漢方と蘭方を含めた医学研究にいそしんでいる間に、たとえ当時の医学水準が低いものであったとしても、かれは、いわゆる科学の進歩と成功に

目を向けることができたからであり、またこの自然科学の成功にあやかって、一向に進歩を示さない当時の政治経済の学問領域を開拓してみたいという西の希望が生まれてきたとも考えられるからである。

さて、このような下地の上で西は、徂徠学を学び始めたのであった。この西の徂徠学研究は、かれの統一科学の試みにむかってもう一つの準備をととのえるようになったと思われる。そこで、西の朱子学から徂徠学研究への回心を検討して、統一科学に対する徂徠学の関係を明らかにしてみよう。

西が朱子学から徂徠学へと回心をしたとき、ちょうどかれが十七、八歳のころであったが、とくに徂徠の見解のなかで西が注目した見解は、「窮理は学者の事にあらず」ということと、「気質は変化すべからず」ということ¹⁾であった。この二つの見解は、朱子学の理気説に対する徂徠の批判論である。この批判論は、西の統一科学の発想の下地を作り上げていったように思われる。そこで、朱子学の理気説と徂徠の批判論とにふれながら、徂徠の見解が西の統一科学の発想にどのようなつながっていくかを見ることにしよう。

西は徂徠学を知るまえに朱子学を学んでいた。とくに山崎闇斎の系統をつぐ山口慎斎の教えをうけていたのであり、しかもこの朱子学を「その道至れり尽せり、もって加うべからざる」ものと考えていた²⁾。そこで朱子学の理気説は、一度は西の信奉した学説であった。いま阿部吉雄氏の『日本朱子学と朝鮮』によって理気説を考えてみよう。朱子学のいう理気説とは、一種の宇宙論である。それは、宇宙の究極の实在または万物の根源を太極(理)とみなし、理に基づいて形成された万物の形質を気から成り立つものとみなすのである。したがって、万物を含む世界は、理と気から構成されるものであるが、理は、気を支配し、万物の生成原理となるとともに道德法ともなるというのである。そこで、一般に朱子学は、「理先気後」の考え方をしていたのであった。つまり、朱子学のいう理気説は、理を気の根

拠と考える理気二元論であり、また理優先論でもあった。しかし朱子学の内部には、このような理を主とする、すなわち主理説的理気説とならんで、気を主とし理を気の法則とみなす主気説の主張もあった。前者は、李退溪によって代表され、後者は羅整庵によって代表される。そしてこれら両者の対立した見解が日本儒学にも大きな影響を与えた。日本朱子学で主理説を取った人びとは、藤原惺窩、山崎闇斎らであったが、主気説を取った人びとは、林羅山、貝原益軒らであった。³⁾

さて、西周は、山崎闇斎の流れをくむ山口慎斎に教えをうけたから、朱子学としては主理説的な理気二元論を「その道至れり尽せり」とみなしていたといえることができる。ところが、西が初めてふれた荻生徂徠は、この理優先の理気二元論を徹底的に攻撃したのである。徂徠によれば、朱子学の欠点は、理が「太極」すなわち万物の根拠であり、生成消滅の支配原理であり、「万古不易のもの」であるとみなす点にあり、また天と同一のものだとみなす点にある。⁴⁾ このような徂徠の批判は、主理説的理気二元論に対する攻撃であった。⁵⁾

徂徠は、さらにこの理気説を攻撃している。朱子学は、聖人の道を理によって尽すことができると考えるが、これは大きな誤りである。人間は、どのようにしてこの理をとらえることができるのであろうか。朱子学は、まったくこのことを検討しようとしなない。徂徠は、この理をとらえる方法のなかに朱子学の欠点の一つを見つけようとする。すなわち、朱子学者が理をとらえようとする方法は、自分の心に浮ぶ勝手な意見にしたがって自分の心でとらえたものをただちに理であると考えてしまい、自分は理すなわち天を知っていると豪語してしまう。これこそ誤りの最たるものであるというのである。すなわち、

「後世の学者、私智を逞うして自用を喜ぶ。その心傲然として自ら高し。先王孔子の教に遵わず。その臆に任せてもってこれを言う。ついに天即理なりの説あり。その学理をもって第一義となす。その意におもえらく聖人

の道は、ただ理のみもってこれを尽すに足る。此れその見る所をもって、天即理なりと曰う。則ちよろしくもってその天を尊ぶの至となすべきがごとくなるべし。然るに理はこれをその臆⁶⁾に取る。則ちまた天われこれを知ると曰う。あに不敬の甚しきに非らずや。故にその説を究むるに、必ず天道知るなきに至りて極まれり。」

この引用文にいう「理はこれを臆⁶⁾に取る」とは、「理を心」に求めること、いいかえれば自分の勝手に考えだした臆見を理とすることである。ところが、このように主観的な内観の法をとるならば、その結果も主観的な臆見をもたらすにすぎないと徂徠は考える。すなわち、

「理を心に求むるに、心昏ければ則ち理は得てこれを見るべからず。故にまた居敬の説有り。もってその心を持す。心あに持すべけんや。皆臆度してもってこれを言いて、いまだかつて親しくその事をなさざる者なり。故にその説聴くべきがごとく、俗人の悦ぶ所となる。皆な私意妄作より出ず。古の道に非らざるなり。」⁷⁾

それどころか理は、「形なし、ゆえに準なき⁸⁾」ものであるから、聖人だけが理を取り扱えるものであり、一般人は、理を窮めることなどとうていできる筋合ではないというのである。⁹⁾ この徂徠の窮理不可能論が西にうけ入れられて、「窮理は学者の事にあらず¹⁰⁾」という西の表現になったのである。

このように徂徠が朱子学を「皆な臆度してもって言う¹¹⁾」ところの空理の学とみなし、より実理的実践的な見解を主張したが、西はこの実理主義実践主義をうけ入れたのである。この西の実理的態度は、かれが西洋哲学に接して取捨選択するときの選択基準の一つになっているのである。

たとえば、西は、おそらくオランダ留学中の作らしい『開題門』のなかでラショナルイズムの哲学と実証哲学との間の取捨選択を問題にしているが、その選択基準は、この徂徠からうけ入れた実理的態度にもとづくものであった。すなわち西は、西洋のラショナルイズムの哲学のうちに朱子学と

同様な空理的態度があることを指摘して、これを斥けている。すなわち、
 「それ西洲のごときは、世その人に乏しからず、ターレスこれを東に唱え、ピタゴラスこれを西に興し、ソクラテスに基づき、プラトーン、アリストテレスに盛にして、ストイックに継ぎ、スカラスチックに衰う、すなわちベーコンに至り、デカート再びこれを振るい、新ヒロソヒ間間に興り、クラク、ホップスの諸賢輩出し、カントに振るい、ヘーゲルに盛なり、余謂らく、宋儒とラシヨナリズムと、その説出入ありといえども見る所頗る相似たり。ただ輓近、ポステイビズム、拠証確實、弁論明哲、まさに大いに後学を補なうあらんとす。これ我が亜細亜のいまだ見ざるところにして、オーギュストコント実に首めてこれを唱う。けだし理を胸臆に取り、根際あるなし。論大にして語詳なりといえども、裨する所幾何ぞ、弁駁相継ぎ、支吾互に発す、いわゆるヒロソヒのアナルキに非らずや¹²⁾。」

このように西が宋儒とラシヨナリズムを批判するのに徂徠の使用した「理を胸臆に取り」という批判点を採用したことは、西が徂徠の批判精神をうけついで西洋の観念論哲学を拒否し、実証的実理的哲学に傾むいていったことを示すものである。したがって、徂徠学は、西がコント、ミルの実証的哲学に一步近づかせるのに役立つということが出来るように思われる。

さて、徂徠の理気説批判には、もう一つの主張がある。それは、西が徂徠に傾倒した点の一つ、すなわち「気は変化すべからず」という主張である。そこで、まず気をめぐる朱子学と徂徠学の見解を検討し、西が徂徠学をどのように吸収していったかを見ることにしよう。徂徠は、すでに述べたように、主理説的朱子学の形而上学的宇宙論の空理性を批判しており、そこから気を論じる場合にも、宇宙における気よりも人間における気を論じることの方が多い。したがって、朱子学のいう気と徂徠のいう気とを比較するのに、人間の性のうちにある気を取りあげて考えてみることにしよう。

朱子学は、人間の性のなかに本然の性（天理）と気質の性を含ませる。そして本然の性が理であり、これを「性即理」と表現した¹³⁾。これに対して、気質の性は気といわれる¹⁴⁾。すべての人間は本然の性（天理）を持っているから、この点で普通人も聖人も異なるところがない。ただ聖人と普通人とは、気質の性（気）において違っているのである。したがって、朱子学は、心に省みて寸時も怠ることなく起居動作を慎むことである居敬を行ない、またすでに述べた窮理を行なうことによって、ついには気質を無に帰してしまい、普通人にも聖人の本然の性を得させることができると主張したわけである。たとえば、『近思録』のなかで周濂溪はつぎのようにいっている。

「孟子曰く、心を養うには欲を寡くするより善なるはなしと。予謂らく、心を養うは寡くして存するに止まらざるのみ。けだし寡くしてもって無きにいたる。無なれば則ち誠立ち明通ず。誠立つは賢なり。明通ずるは聖なり。」¹⁵⁾

したがって、朱子学派は、けっきょく普通人も私欲を窮理居敬の法によって無くしてしまい、ついには聖人になれると主張したのである¹⁶⁾。

これに対して徂徠は、気質の性を気とし性としながら、人間に個別化されてはいつてきた理としての本然の性を認めようとはしない。かれによれば、本然の性、気質の性の区別は、宋儒（宋代の朱子学者）の恣意によるものであって、もともと人間には本然の性はないのである。これに対して気質の性といわれるものは、胎児のときから人間にそなわったものであり、人間が自分で勝手に改変することができないものであると主張したのであった。すなわち、

「その性に本然あり気質ありというものは、けだし学問のためにことさら設く。また孟子を誤読して、謂らく人性みな聖人と異ならず、その異なるところは気質のみと。ついに気質を変化してもって聖人に至らんと欲す。もしただ本然のみにして気質なからしむれば、則ち人人聖人たり。な

んぞ学問を用いん。またもしただ氣質のみにして本然の性なからしむれば、則ち学ぶといえども益なし。なんぞ学問を用いん。これ宋儒の本然氣質の性を立つるゆえんの意なり。然るに胚胎の初め、氣質すでに具わる。則ちそのいうところの本然の性は、ただ天にのみ属すべくして、人に属すべからざるなり。……人の性は万品にして……得て變ずべからず。¹⁷⁾」

このように徂徠は、人性を変化させ氣質を無にすることができないと主張した。かれは、むしろこの氣質の性に近いところにしたがって、政治的実践的方策を考えて編み出していこうと考えたのである。そこから「性(氣)に率いてもって教を建つ」といったのである。¹⁸⁾つまり理氣の二要素については徂徠は、氣を重大視し、氣のいかんをはかって実践的方策を考えていこうとする点で、朱子学派でも貝原益軒らの主氣説や陽明学派の氣優先論に似た立場を取ったことになる。この氣優先論を、西は徂徠をとおしうけ入れた。

このことは、第一に西が徂徠にしたがって各自の主観的意見にもとづいた抽象論を展開する理優先の見解を捨てたことを意味している。第二に、このことは、西が徂徠にしたがって天から与えられたありのままの人間性をそのまま受けとめて研究し、その人間研究にもとづいて政治、経済における道理の研究を行なっていこうとする態度をうけついだことを示している。第三に、このことは、西がコントに接するまえに、現実の人間研究(氣の研究)を土台として実践的研究(道理の研究)を見ていこうとする構想を荒削りではあるが持つことができたことを意味している。そして西がコントの哲学に接したとき、この徂徠からうけついだ構想の下地があったために、西はコントをかなり容易に理解することができたように思われる。

ところで、徂徠の見解が氣の研究、すなわち人間性の研究によって氣を明らかにしたのち氣に従って「道」を制作していくこと、すなわち政治的実践的研究に進むことであったのに対して、西のオランダ留学中ないし帰朝間もないころの作品と見られる『開題門』のなかでは、すでにコント

哲学をあるていど学んでいた西は、気をば、主として自然科学一般を含むものとしての「気科」としてとらえなおしており、整備された自然科学の方法にもとづいた「気科の成功」を土台として人間学ソシオロジーの意味に解された「理科の大義」を解明していこうという構想に修正発展させたのである。西は、『開題門』註四においてこの点をつぎのように表現している。すなわち、

「然らば則ちその百学と相関渉するゆえんの者はいかん。曰く気科の成功に因りて、理科の蘊奥を開らくと。」¹⁹⁾

このように気科を土台にして理科を開明していくのに、西は、コント、ミルの方法を採用し、百学の統一をはかる見解をつぎのようにいい表わしたのである。

「ただその学の方となすがごときは、則ち今日にして論すでに定まるあり。もとより夫れ空を鑿ち虚ナラに摹ナラい念を刻し想を架すの妄を仮らずして、これを実物に験し、これを実知に体し、的然の証を徴し、確乎の因を鈎し、もって天常不易の故に達す。積功の夥なること、累世の久しき、至らざるを患えず。性命の源、道德の本、粲然としてこれを掌中にミ脈る。またなんぞ偏見に拘わり、一徳に泥まん。概をもって理を衆(聚の意?)するの為あれば則ち数百載の後、斯道の闡明なること、火を観るがごとし。匹夫もまた得てこれに参ず。その人心の新と世道の革果とにおけるやいかん。然らば則ちその百学と相関渉するゆえんのものはいかん。曰く、一は則ち気科の成功を萃つむと。たとえば大海の併函して河泉を洩らさず。溪潭流れて此に注ぐがごとし。一は則ち理科の大義を啓らく。たとえば大嶽の時立して動かず、巒峰岬崎脈を此に発するがごとし。英を茹らい華を吐き、左右その源に逢えば、則ちヒロソヒの能事畢れり。」²⁰⁾

このように、西は、徂徠的構想を下地として、コント的統一科学の構想を巧みに接着していこうという意図を荒削りながら、この時期にすでに抱きはじめていたのである。

2. 統一科学の構想 (1)——『百一新論』の試み——

さて、『百一新論』は、出版は明治七年であるが、すでに西が慶応二、三年ごろ (1866-67) 京都在住時代に執筆していた著作らしいといわれている。²¹⁾ この著作のなかで、西の、オランダ留学時代 (1863-65) の作といわれる『開題門』のなかでわずかながらふれられた統一科学の試みは、「百教一致」という主張のなかで一層発展した形をととのえてくる。

ところで、「百教」のなかの「教」の字には、いろいろの意味合いが含まれているが、西は、そのなかから第一に宗教の意味を取り除き、もっぱらその意味を「人道ノ教」²²⁾に限定するのである。第二に、西は、「治人」すなわち法律政治に関することがらを「教」の意味から取り除き、「教」をもっぱら人を導く事柄に限定した。²³⁾ この「法」と「教」の区別について西は、つぎのようにいうのである。

「偕此正直公平ト善美能好トヲ主トシテ教ヲ施シ、法ヲ制スルニハ其主意ノ違ッタヲ、時トシテハ相齟齬スルヲナドガゴザッテ、君臣父子ナド云フ所ハ勿論人間ノ死スル終リニ亘リ、己レー身ヲ行フニモ又其所処デハナク、禽獸ヨリ草木土石、無情ナ物ニ処スルニモ心裏ノ極々ノ洞底^{ドソソコ}マデモ至ラザルハナク関渉シナイヲハゴザラヌガ、法ハ其レト替ハリ唯人間ガ人間ト相交ハル上ニバカリ有ルヲデ、君臣トカ、父子トカ、夫婦トカ、兄弟トカ、或ハ金ヲ貸シタ人ト借リタ人トカ、人ヲ傭ッタ人ト傭ハレタ人トカ、物ヲ貰ラフ人ト物ヲ呉レル人トカ、総テ世間ノ交際ノ上ナラデハ関係ヲ持タヌヲデゴザル。²⁴⁾」

したがって、教とは「脩己」²⁵⁾または「人心ヲ攻メルモノ」²⁶⁾にかかわるものと解されている。西は、この教のさまざまな内容すなわち「百教」を「極意ノ所ヲ考フレバ、同一ノ趣意ニ帰スレバヨソ一致トハ申」すのである²⁷⁾という。

この教について「極意ノ所」を考えるとということはいったいどういうこ

とであろうか。西は、この点についてまだ『百一新論』では詳しく論じておらず、ただつぎのようにいっているだけである。すなわち、

「今百教ハ一致ナリト題目ヲ設ケテ、教ノコヲ論ズルモ種類ヲ論ジタラバ、此哲学ノ一種トモ云フベクシテ、仔細ハ若シツノ教門ヲ奉ゼバ其教ヲ是トシ、他ノ教ヲ非トスルコト常ノ事ナルニ、百教ヲ槩論シテ同一ノ旨ヲ論明セントニハ余程岡目ヨリ百教ヲ見下サネバナラヌコトデゴザル。」²⁸⁾

さて、「哲学」という用語が日本において初めて使用されたこの文は、学問全体を客観的に概観することを主張しているが、その概観の仕方はというと、「百一新論」から汲みとるところでは、学問全体をいくつかの客観的なカテゴリまたは原理によって区別し、またそれらによって学問体系相互の関連性を検討していくこと、またそれによって学問全体の体系化を行なっていくということである。では、このような客観的なカテゴリとはどんなものであろうか。西は、『百一新論』においては物理と心理の区別と行門と観門の区別を指摘しているにとどまっている。

さて、物理とは「天然自然ノ理」であるが、心理とは「唯人間上バカリニ行ナハレル理」であり、両者は互いにすこしも「関渉」していないと考えられている。²⁹⁾ この物理と心理の区別は、すでに述べた『開題門』では「気科」と「理科」とに平行であるが、後の『百学連環』および『生性発蘊』における西の統一科学の試みにおいても重要な役割を果たしているので、次節以下でまとめて論じていくことにする。

ところで、「教」は、すでに述べたように「人道ノ教」であるから、心理を中心とした学問分野であり、物理とは関係しないように考えられる。しかし、西は、物理もまたここであるていど関係するものとみなすのである。そしてこれを説明するために、かれは、観門と行門の区別を立てるのである。観行の区別は、『百一新論』ではあまり詳しくふれられていないが、それは、「^{セオリ}観察」と「^{プラクティス}実際」の区別に対応するものである。³⁰⁾ この区別を利用して西は、物理と心理とを学問分野のなかで関連づけるのである。す

なわち、

「其行門ハ専ラ 性理上ニ本イテ法ヲ 立テタ者デゴザレバ、物理ノ論ニハ及バヌヲデゴザルナレドモ、観門ノ方デハ物理ヲ参考ニ致サナクテハナラヌヲデゴザル。併シ物理ト心理トヲ混同シテ論ジテハナラヌヲデゴザルガ、其物理ヲ参考致サナクテハナラヌト申スノハ、人間モ天地間ノ一物デゴザレバ、物理ヲ参考ニ致サナクテハナラヌデゴザル。」⁸¹⁾

つまり、物理と心理は、混同はできないが、観門または理論と行門または実際という領域を考えると、理論の方は無機物質から人間の生理にいたるまでの観察、理論を含むものであり、したがって、当然物理にかかわるが、^{プラクティス}実際の方は、この理論を参考にし土台にして考究しなければならないわけであるから、「人道ノ教」を問題にする「教」も、心理を検討するための予備的土台として人間の生理、生物学的原理、すなわち物理を考えねばならないということになる。したがって、西は、ここですでに物理の学問領域の上に積重なった形で心理の学問領域を置くという学問全体の体系を考えていたということができよう。

さて、このような構想から西は、学問体系をつぎのように概観したのである。すなわち、

「是ハ物理ト申ス内ニモ 彼ノ造化史ノ学ヲ主トスルヲデゴザッテ、其造化史ハ先ズ金石、草木、人獸ノ三域ニ就テ諸種ノ道理ヲ論ジ、傍ラ地質学、^{ゼオガラヒー}古体学ナドト分レテ、此大地ノ出来タ初メニ反リ、又人獸ノ部ニテハアン^{コンベレチーフ}トロホロジー^{アナトミー} 訳シテ人性学ト云ヒ、先ヅ比較ノ解剖術ヨリ生理学、^{ピシコロジ}性理学、^{エトノロジ}人種学、^{テオロジ}神理学、^{エステチーキ}善美学、又歴史等ヲ総ベ論ズル學術ヲ取別ケ物理ノ参考ニ備ヘネバナラヌヲデゴザル、総テ箇様ナヲ参考シテ心理ニ徴シ、天道人道ヲ論明シテ、兼テ教ノ方法ヲ立ツルヲヒロソヒー、訳シテ哲学ト名ケ、西洋ニテモ古クヨリ論ノアルヲデゴザル。」⁸²⁾

この引用文からすれば、西の『百一新論』における統一科学の構想は、物理と心理、観門と行門といったカテゴリを使用しながら、学問全体を概

観しようとし、またそれらの関連性を追求しようとする点にあった。しかし、その構想は、やっとならぬととのえたところであって、西の統一科学体系はまだ幾多の道程を通らねばならなかったのである。

3. 統一科学の構想 (2)——『百学連環』の試み——

さて、西の統一科学の構想は、明治三年の『百学連環』にいたって飛躍的に形を整えることになった。この『百学連環』は、公刊された著作ではなく、かれが私塾育英社において講義したものであり、かれの弟子永見裕の筆記と西自身の講義案が残されているだけである。しかし、ここにおいて、西は、統一科学を積極的に立てようと努力しているのであり、たとえ成功したものではなかったけれども、統一科学のための諸カテゴリや諸原理をかなりつつ込んだ形で検討しているのである。

さて、これまでわれわれは、西の統一科学の背景、および『開題門』と『百一新論』におけるかれの試みを検討して、かれの統一科学にはかれの徂徠学研究と医学研究、およびコント、ミルらの実証主義的思考があること、さらには物理と心理、観門と行門といったカテゴリの重要な役割をかんたんに見てきたのであるが、『百学連環』においては、西は、さらに統一科学を立てることが科学教育を行なうための最善の方法であるという見解をも主張するにいたった。西は、『百学連環』の巻頭にこの点をつぎのようにいっている。

「英国の Encyclopedia なる語は、希臘の Enkuklios paideia なる語より来りて、即其辞義は童子を輪の中に入れて教育をなすとの意なり。故に今之を訳して百学連環と額す。従来西洋法律等の学に於ては、総て口訣を以て教授なすと雖も、此 Encyclopedia なるものを以て口授するの教あることなし。然れども英国に Encyclopedia of Political Science なるものありて、即ち口授するの教へあり。故に今之に倣ふて浅学の輩を導かむと

欲する余が創見に出る所なり。」¹³⁾

さて、西の『百学連環』のなかでの統一科学の構想の根底には、上に述べたような、「浅学の輩を導かむ」とするかれの実践的関心が横わっていた。ところで、西は、この見解を自分の「創見」であるといっているが、教育的目的から統一科学を志そうとする考え方は、コントのなかにもあり、むしろ西がこの点についてもコントによっているのではないかと思われる。たとえば、西は、明治四年～六年の『生性発蘊』のなかでG・H・ルイスの『コントの科学哲学』の部分訳を試みているが、このルイスの本のなかで統一科学が科学教育に貢献するというコントの見解が見いだされるのである。もっともこのコントの見解は、西が翻訳した部分にはないが、西の翻訳した部分より前にある章のなかの文であるから、西によってすでに熟読されていたことは確かであろう。今その文を引用してみると、つぎのとおりである。

「自然の順序にのっとして諸科学を学んでいく（統一科学的理解のこと）ようにならないうちは、科学教育のもっとも一般的で本質的な効果を發揮させることはできない、というのがコント体系の根底にある命題である。」³⁴⁾

このコント体系の命題は、まさしく西が『百学連環』の巻頭に述べた命題でもあった。そして西は、『百学連環』を講義していたころコントに依存していたし、その依存も実は大部分ルイスのコント紹介を通してであったから、上に述べたコント体系の命題を『百学連環』のなかでそのまま表現したものと見ることができるようと思われる。³⁵⁾

このように、西は、教育と統一科学の関連性を考えるコントおよびルイスの見解に支えられながら、明治初年の日本の青年に洋学を教えるのにもっとも効果的な方法として統一科学の体系を選んだように思われる。

さて、明治三年の『百学連環』は、明治六年の『生性発蘊』とともに自然科学から社会科学および人文科学にわたる雄大な統一科学の構想を展開するのである。両著作は諸科学の統一の観を立てようとする点で一致して

いるが、相違点もかなり見出だされる。その相違は、西の統一科学の構想の変化を示すものである。『生性発蘊』については次節において詳しく取り扱うが、ここで両著作のかんたんな比較をしておくことにしよう。

『百学連環』は、統一科学を打ち立てるための原則を論じた『百学連環総論』と、その原則にもとづいて諸科学の統一体系を具体的に述べていく各論からなるが、『総論』に展開されている原則は、ウイリアム・ハミルトンとコントの両方から、とくにハミルトンから得るところが大きい。これに対して『生性発蘊』は、全体としてコントに依存する所が大きい。もっとも西がコントを引用するとき、かれは、コントの著作をじかに引用したのではなく、すでに述べたように、G・H・ルイス (1817-1878) の書いた “The Biographical History of Philosophy, 1857.”³⁶⁾ と、“Comte’s Philosophy of the Sciences”²⁷⁾ のなかのコント紹介を引用しているのである。ところが、『百学連環』と『生性発蘊』とでは、同じ『コントの科学哲学』の本を引用するにも、西は、別々の箇所を主として引用しているらしく思われる。たとえば、明治三年の『百学連環』では同書の第一部前半 (Section I-Section XV) をより所の一つとしているらしいのに対して、『生性発蘊』では同書の第一部後半 (Section XVI-Section XXI) が翻訳され、あわせて『哲学史』のコント紹介部分が翻訳されているのである。

このような引用箇所の相違は、そのまま西のコント理解がルイスの上掲書の Section 順位に従って進んでいったことを示している。さらにこの相違は、西の二つの著作の強調点の相違をも示唆している。たとえば、『百学連環』は、諸科学を統一的に説明して関連づけることを目標としているが、これに対して、『生性発蘊』は、統一科学を打ち立てる原則そのものを明らかにすることを目標とし、とくに統一科学にとっての最大の難所である生理学 (内体の学) と性理学 (精神の学) との間の橋渡しを試みることを目標としているが、この目標の相違は、『コントの科学哲学』の第一部前半と後半の内容の相違を反映しているのである。

このような目標の相違を西の統一科学へのアプローチの変化として見る
ことができるので、この両著作を別々に取り扱い、この節においてはとく
に前者の『百学連環』のなかの試みを検討してみることにしよう。

さて西は、『百学連環』のなかで行なっている統一科学の直接の目標を
つぎのようにいっている。すなわち、「唯々學術に相関渉して要用すると
ころのみを挙げ、且つ和漢のことを斟酌して説論³⁸⁾」することである。ここ
で、西がいう學術の「相関渉」する点を明らかにするということは、諸科
学の分類を行ない、それらの依存関係を明らかにすることである。西は、
この諸科学の分類と依存関係の原則をハミルトン、コント、ミルの三者か
ら学びとっていった。そこで、われわれは、西がこれらの思想家の見解を
どのようにうけ入れながら自分の統一科学の構想を展開していったかを、
見ていくことにしよう。

さて、西は、『百学連環』のなかで、統一科学の鎖として第一に学と術
との区別を挙げ、この区別によって諸科学を関係づけようとしている。す
なわち、

「此編を額して連環と呼なせしは、學術を種々の環に比し、是を二筋の
糸を以て連ねたる如く、学と術と二ツに區別し、始終連ね了解せんことを
要す³⁹⁾。」

したがって、学と術とは、統一科学の原則の一つであった。では学と術
とは、何であろうか。西は、學術の区別についてハミルトンの名を挙げ、
かれの区別を引用して、學術についてつぎのように説明している。すなわ
ち、学問は、「其源由よりして其真理を知る」ことであり、術は、「何事に
ても、実事上に於て其理を究め、如何にしてか容易く仕遂べきと工夫を為
す⁴⁰⁾」ことである。いいかえれば、学は、真理を知ることであり、術は、
「其知ル所ノ理ニ循ヒテ之ヲ行フノ上ニ係ハル⁴¹⁾」ことである。したがって、
術にはかならず学がなければならぬのであり、ここに学と術との関連性
が見いだされる。

さてハミルトンのいう學術の区別は，“Lectures on Metaphysics and Logic”⁴¹⁾に散見されるが、それは、アリストテレスの区別を踏襲した説明原理である。ハミルトンは、まず学 science を思弁学 speculative science と実践学 practical science とに区別する。これは、学の中の観察(理論)^{セオリ}と実践^{プラクティス}という西の区別に対応する。またこの区別は、ルイスの『コントの科学哲学』に述べられた一般学 general science と特殊学 special science の間のコントの区別にも対応しているように思われる。たとえば、コントは、幾何学を例として、いかなる形態についてもあてはまる普遍的理論 universal theory としての一般幾何学 general geometry と、個別物体に通用される特殊幾何学 special geometry とを区別するが⁴³⁾、これは、ハミルトンの学の中の理論と実践と重合して、西の「単純の学」と「適用の学」の区別として投影されているように思われる。すなわち、

「単純の学 (pure science) とは理に就て論じ、適用の学 (applied science) とは実事に就て論ずるなり、之を算術に依て譬ふときは、 $2+2=4$ pure, 是則ち単純の理に当てゝ用ゆるなり、 2 犬 $+2$ 鳥 $=4$ 匹 applied. 是亦学なりと雖も、業(実事)に就て用ゆるを云ふ、是則ち学の区別なり⁴⁴⁾。」

では、術^{アート}とは何であろうか。西は、術と実践学との区別についてもやはりハミルトンの区別にしたがっている⁴⁵⁾。ハミルトンは、術を実践学の一部に所属させるが、さらに実践学の実践 practice ということのなかに、アリストテレスに従って二種類の行動を分けるのである⁴⁶⁾。一つは、ダンスや音楽のように、「^{アクション}終りがやはり行動にゆきつく^{アクション}行動」であり、これは、狭義の実践である。もう一つは、絵画や彫刻のように、「ある永続的な生産物を生みだす行動」であり、「^{ポイエーシス}生産」を意味する。ハミルトンは、後者を術と呼んでいる。そこで、目的として幸福をめざす倫理学や政治学は、幸福という一種の^{アクション}行動に終るものであるから、実践学 practical science とされ、論理学やレトリックは、推理や演説を生みだすことが目的であるから、術とされるのである。西は、この区別を一応うけ入れて、「術とは生

ずることを知ると原語の通り、其成り立所以を明白に知るを云ふなり……
 science inquires for the sake of knowledge, art, for the sake of
 production⁴⁷⁾ という。

したがって、術は、知る部分（理論）と生産につながる行動（実践）の
 部分とを含むから、理論と実践を含むことになる。西は、この術の二部分
 を観察と実際と訳したのである。これに対して、学もまた違った意味の理
 論と実践を含んでいた（思弁学と実践学）から、西は、「theory（観察上）、
 practice（實際上）、学に於ても又術においても、観察、実際共になかるべ
 からず⁴⁸⁾」といったのである。

さらに、西は、術を^{メカニカル・アート}技術と^{リベラル・アート}芸術にわけ、前者を「技とは、支体を勞
 するの字義なれば総て身体を動かす工夫の如きもの」であるとし、後者を
 「芸は、心思を勞する義にして総て心思を働かし詩文を作る等のもの⁴⁹⁾」と
 している。西は、上のような學術の分類と関連を統一科学の原則の一つと
 みなしたのである。

いま上に述べた學術の分類をまとめてみると、つぎのような表ができる
 であろう。すなわち、

{	学	theory (観察上) —— 単純の学 pure science				
		practice (實際上) —— 適用の学 applied science				
{	術	^{リベラル・アート} <table style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="font-size: 2em; padding-right: 5px;">{</td> <td style="padding-left: 5px;">theory —— (知る部分)</td> </tr> <tr> <td style="font-size: 2em; padding-right: 5px;">}</td> <td style="padding-left: 5px;">practice —— (生産行動の部分)</td> </tr> </table>	{	theory —— (知る部分)	}	practice —— (生産行動の部分)
		{	theory —— (知る部分)			
	}	practice —— (生産行動の部分)				
	^{メカニカル・アート} <table style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="font-size: 2em; padding-right: 5px;">{</td> <td style="padding-left: 5px;">theory —— (知る部分)</td> </tr> <tr> <td style="font-size: 2em; padding-right: 5px;">}</td> <td style="padding-left: 5px;">practice —— (生産行動の部分)</td> </tr> </table>	{	theory —— (知る部分)	}	practice —— (生産行動の部分)	
{	theory —— (知る部分)					
}	practice —— (生産行動の部分)					
芸	theory —— (知る部分)					
	practice —— (生産行動の部分)					

さて、西が採用した統一科学の第二の原則は、^{コモン・サイエンス}普通学と^{パティクラ・サイエンス}殊別学の
 区別、およびそれらの関係である。西によれば、「普通とは一理の万事に
 係はるを云ひ、殊別とは唯タ一事に関する⁵⁰⁾」ことである。そこで、普通学
 は、殊別学全体にまたがる理を問題にするから、殊別学に対する基礎学
 または手段学の地位をしめる。これに対して殊別学は、普通学という基礎
 学の上に成り立つ個別学となるわけである。また西は、普通と殊別の関係

西周による統一科学の試み

を、學術のなかの手段^{ミーンズ}または策、媒^{メジュー}と、目的^{ミディアム}という関係としても説明している。たとえば、「文章学、詩、歴史学、語源学、論弁学」などの「文事（普通学）」は、真理を知るという目的を持つ学（殊別学）や「仕遂くべき目的³⁰⁾」を持つ術に対して、「方略及ヒ策、媒」になるというのである。

西は、普通学として上記の歴史、地理学、文章学のほかに数学を挙げ、殊別学には、神理学（神学）、哲学、政事学（政治学、法学）、制産学（経済学）、計誌学（統計学）を含む心理上学と、格物学（物理学）、天文学（星学）、化学、造化史（自然史）を含む物理上学を挙げたのである。この普通と殊別の区別と関係は、ほぼコントの統一科学の分類と関係に依存しているが⁵²⁾、しかし、明治三年の『百学連環』においては、西はまだ十分にコントの統一科学の原則を理解したとはいえず、上述の普通と殊別その他二、三の分類までで止まっていたのである。

一方、コントと西の体系にはある種の相違が見られる。たとえば、コントは、抽象的理論的分野^{アブストラクト}の学の統一体系だけを立てようとしており、学を数学、天文学、物理学、化学、生理学、社会学だけに制限したのに対して、西の体系は、コントの体系を含むとともに学の実践的分野に倫理学、政治学その他を含み、術には技術と芸術を網羅する雄大な体系をめざしたのである。もちろん西は、統一科学の体系を作る原則に対して十分研究していなかったもので、コントを越えた膨大な学問体系を統一しようとしたときに無理が生じてしまい、『百学連環』においてはけっきょく西の体系は、學術の羅列的説明に終ることになったように思われる。

さて、西が『百学連環』の第三の基本原則として取り上げたものは、コントの三段階説とミルの帰納法である。コントの三段階説について、西は、つぎのようにいっている。

「近来仏国の August Comte なる人の発明せし語に、総て何事にもあれ最初より都合克く遂るものにあらず、其を遂んには stage 即ち舞台、或は場と訳す字にして、其場所三つあり……其の第一の場所とは Theological

Stage 即ち神学家，第二は Metaphysical Stage 即空理家，第三は Positive Stage 即ち実理家，此に至り始めて止ると言へり。⁵³⁾」

西がコントにしたがって最後の段階の実理の立場に立とうとしたことは、すでに再三ふれてきたことであるが、この実理の立場に立つには、実証的方法を採用しなければならない。ところが、コントの方法は、この点でまだ十分ではなかったのである。そこで、西は、真理を明らかにする方法として J・S・ミルの「新致知法」³⁴⁾、すなわち帰納法をうけ入れた。このミルの方法というのは、西によれば、

「元トは A Method of New Logic にして、英国の John Stuart Mill なる人の発明せし所なり。其著はす所の書籍は System of Logic とて随分大部なるものなり。是よりして学域大に改革し、終に盛むに及へり。其改革の法たる如何となれば、inductive 帰納の法なるあり。⁵⁵⁾」 といっている。

では、西はミルの帰納法をどこまで理解したのであろうか。かれは、明六社社員のうちでミルの『論理学体系』をもっともよく理解した人であるが、帰納法をどのていど理解したかという段になると、かれの帰納法の叙述を見るかぎり、一応理解しているというところである。まずかれは、ミルの二つの想定を認める。すなわち、

第一に、「各個の事実もしくは数個の見象は、^{フェノメソ} 一個もしくは数個の理法をもってこれを貫通す (Every fact or phenomen is governed by a law or laws)」という想定である。

第二に、「同一の因縁は、^{コーズ} 同一の応効を生ず (^{エフェクト} Like causes produce like effects)」という想定である。⁵⁶⁾

西は、これら二つの想定を認めたあとで、普遍的事実または真理を得るために、単純枚举の方法を挙げて、つぎのように帰納法を説明している。すなわち、

「何事にもあれ許多を集めて其中真理一ツなるを知るなり。譬へは今試

に石を投けても地に落ち……鉄を投けても悉く地に落ちるを知る。是即ち fact にして、悉く地に落ちるは真理の一ツなるものなり。⁵⁶⁾

この程度の帰納法理解は、ベーコン的な単純枚挙による一致法 the method of agreement の帰納法である。

さらに、西は、「Positive Result 陽効表」と「Negative Result 陰効表」を挙げ、これを「善を知り、又悪を知り、用を知り、又不用を知るが如き、不用のものも知るといふ義⁵⁸⁾」であると説明する。これは、おそらくミルの差異法 the method of difference ないし一致・差異共用法 the joint method of agreement and difference を説明しようとしたもののように思われる。³⁹⁾『百学連環』ではこの外、剰余法 the method of residues 共変法 the method of concomitant variation についてはほとんど説明がなされていない。ただ明治七年出版の『致知啓蒙』にいたって、これらの方法の名が挙げられるのである。⁶⁰⁾ところが、『致知啓蒙』においてさえ、西は、これらの方法の説明をせず、「学者ソレ之ヲ本書ニ講究セヨ⁶¹⁾」と逃げている。

以上見てきたところからすれば、西の帰納法理解は、一応の理解を示しているが、その使用法と限界を十分に知っていたかどうかは疑わしいのである。とくに、西が『百学連環』を講義していた時代には、西は、個別科学に帰納法を適用することに関心を持っていたのではなく、むしろ諸科学の統一に関心を持っていたのであるから、かれの帰納法についての知識があるていど大ざっぱであったとしてもやむをえなかったであろう。

さて、西の統一科学的構想の第四の原則は、物理と心理の領域的区別であった。この区別は、第一節、第二節でかんたんに述べたように、朱子学の理気説と徂徠学の気優先説からも影響されているが、西の統一科学の構想にとってきわめて重要な意味合いを持つ区別であった。しかも、この区別は、『開題門』、『百学新論』、明治三年の『百学連環』、明治四年～六年の『生性発蘊』、明治七年以後の著作とで、かなり違ったとらえ方がなさ

れている。

さて、物理と心理との区別は、すでに第一節にも述べたように、いち早く『開題門』に現われる。この区別は、朱子学の理気説から影響をうけるとともに徂徠学派の物理と道理の影響を見ることができる。すなわち、物理と心理の区別は、もともと朱子学の気と理に対応するものにその根源があるが、その領域区別の意味内容が、西においては朱子学を離れて、徂徠学派の影響の下に変化していくのである。たとえば、西が、『百学連環』のなかでも引用している徂徠学派に属する太宰春台の『経済録』のなかには、物理と道理の区別がすでに述べられてあったのである。すなわち、春台のいう物理とは、つぎのようなものであった。

「理ハ道理ニ非ズ、物理ノ理也、物理トハ、凡ソ物ニハ必理アリ、理ハ木ノモクメ也、物ノスジメ也、木ノ木目ヲ木理ト云、玉石人類ニモ必モクメ有リ、玉ノモクメヲ玉理トイヒ、石ノモクメヲ石理ト云、人ノ肉、鳥獸魚鱉ノ肉ニモ必ズモクメアリ、肉ノモクメヲ肉理ト云……、凡物ニハ必ズスヂメト云モノアリ、是ヲ物理ト云。」⁶⁴⁾

したがって、太宰の物理とは、「自然ノ理」⁶⁵⁾であり、コントとミルの物理に通ずる法則であって、西は、「物理」という語を用いた場合にも、このような日本儒学の常識とまでなっていた概念を用いたもののようである。

これに対して道理とは、人間の理ないし人間の道德法を表わすものと見られるが、とくに徂徠学派では、道理とは、人為的性格をもつものであった。したがって、物理と道理とは、別箇の法則でなければならない。そしてこの道理は、西の「心理」というカテゴリとほぼパラレルであるものである。⁶⁵⁾

以上西の『開題門』における物理と心理とは、かなり日本儒学のカテゴリを土台にしているように見える。同様に慶応二、三年ごろの作といわれる『百一新論』には徂徠学派の影響もかなり残っており、心理と物理との区別についても、つぎのようにいうのである。

「道理々々ト一様ニロデハ言ヘド其理ニ二通リアッテ、其理ガ互ニ少シモ関渉シテ居ナイト云フコヲ知ラネバナラヌデゴザル……其一ツヲ心理ト云ヒ、其一ツヲ物理ト名クルデゴザル。」⁶⁷⁾

しかも、物理とは、「物質一般ノ理、分性硬性真性固保性引力等ヨリ、避心吸心ノ両力、方ヲ変ジ円ヲナスノ理、光射ノ理、熱伝ノ理、光線色ヲ現ズルノ理、流体動ヲ伝ヘ音ヲ起スノ理、電磁ノ陰陽相和スルノ理等ヨリ、舎密（註・化学）上親和ノ理、原量ノ理等ニ至リ、無機性体金石灰土ノ質ヨリ、有機性体ノ草木人獣ヲ生ズルノ理、機性体中ニ動静二体ヲ分ツノ理……総テ百般ノ道理ヲ物理ト云フ。」⁶⁸⁾というのである。その上この物理は、「人間ノカデハドウスルコトモ出来ズ、イヤデモ応デモ成ル通りニ外ハナラヌ」ものとみなされ、その意味で「^{アブリオリ}先天ノ理」⁶⁹⁾といわれている。

さて、この物理は、人間のなかにも与えられて、「有機性体ノ草木人獣ヲ生ズル理」⁷⁰⁾というような生物学的生理学的法則となるのである。この人間性のなかの物理は、「人間トイフモノノ出来タ所デ其一般ニ存スル性ト云フモノ」⁷¹⁾であり、「人間ニ同一ノ性ト云フモノガ備ハッテ居テ、是レガ性ニ率フ之ヲ道ト云フト云ッテアル通りニ動カスコトハ出来ヌ」⁷¹⁾といわれている。

そこで、西の物理は、太宰春台の物理のカテゴリに西洋近代の自然科学によって発見された自然法則を入れたようなものである。

これに対して西の心理は、「唯人間ノ心裏ニ存スル理」⁷³⁾または「唯人間上バカリニ行ナハレル理」⁷⁴⁾といわれるものである。それは、人間の物理的な「性」にのっとって獲得された「道」または「^{アポストリオリ}後天ノ理」⁷⁵⁾であるといわれる。西が引用する「性ニ率フ之ヲ道ト云フ」という中庸の語は、徂徠も自分の作為の道を説明するために好んで引用したものであり、西が徂徠をとおして中庸の「道」を解し、これを後天的な人為法とみなしていたことは、すでに他の箇所でも十分論じておいた。もちろん西は、この心理を後天の理であるとはいえ、なお「天」であって、みだりに作りかえることはで

きないものであるとはいっている。⁷⁷⁾

以上が『百一新論』における物理と心理の区別であるが、明治三年の『百学連環』になると、コントの影響をうけてやや変えられてくる。ここでは物理と心理は、まったく別のものではなく、ある種の関係が認められている。たとえば、西は、心理と物理とが「互に相関係して分明に弁明なしがたき」⁷⁷⁾ことであるという。ただその間の区別については、「譬へは軍をなすに其強サを論し及び銃砲器械等に就て論する」を物理とみなし、其計策及び方策の如き」を、心理とみなしている。とくに西は、物理に従う⁷⁹⁾て心理が変化するという関連を認める。この物理にもとづく心理の在り方を肯定するという点で、西は、徂徠的見解と共にさらにそれより発展した形のコントの理論をうけつぐが、一方、「物理」は心理よりも学の主として重んずべきものの」ように見えても、「物理を使役するものは心理にして物理は心理に役せらるるに至る」⁷⁹⁾と考える点で、西は、徂徠の人間の作為を重んじる実践的態度をうけつぐのである。

他方、西は、物理と心理を研究方法の相違から区別するが、その区別は、コントの区別すなわち「客観的方法」^{オブジェクテイヴ・メソッド}と「主観的方法」^{サブジェクテイヴ・メソッド}の区別をうけ入れているように思われる。たとえばコントは、心理学の研究方法として「主観的方法 the subjective method すなわち心理現象または機能の研究」と「客観的方法 the objective method」⁸⁰⁾の区別を立て、心理学研究の主要方法を主観的方法に置いたのである。ここで、客観的方法とは、心理現象が依存している有機体の条件を研究するものであり、それは有機体の「物理」に着目するところから、物理上学の方法と同じである。ガルは、⁸¹⁾脳の生理学を研究したとき、この客観的方法を採用したのであり、それは、いわば生理学的生物学的的方法による心理現象の研究であった。ところが、コントは、この客観的方法では心理現象を完全にはとらえることができないと考える。というわけは、心理現象を正確に分析することは、当然道徳的発達状態の分析を予想していなければならないが、この分野を明らか

にするには、高度の社会学説を必要とするからである。したがって、コントは、これらの高度の知的道徳的内容を研究するために、心理的行動の現象そのものを研究する主観的方法（内観法）を提案するにいたったのである。

もちろんコントは、主観的方法により達せられた結果は客観的方法によってチェックされなければならないと考えた。しかしあくまでコントにとっては主観的方法が優位を占め、客観的方法が従を占めたのであった。⁸²⁾

さて、西は、この二つの方法上の区別をうけ入れて、「性理は五官の感触に依て心には是非善悪等を弁別し……interior 即ち内部へ論じ（註、主観的方法）」、「格物（物理学）は五官の感触に依て物と物との係り合を論ず……格物は exterior 即ち外部へ論ずるなり（註、客観的方法）」としてい⁸³⁾る。

さて、以上のように物理と心理とを分けることは、学問を「物理上学」と「心理上学」とに分類して学問の整理を行なうことを示している。しかし、この区別は、『百学連環』においては内容的にはまだ十分の哲学的反省が加えられたとはいえず、西においては朱子学、徂徠学、コントラにもとづいた物理と心理の区別を重合させた形で考えていたにすぎないように思われる。

ところが、統一科学の構想をもっと理論的に展開していくためには、物理学、化学、生物学、生理学といった「物理上学」と、心理学以上の「心理上学」との間に、原理的な関連性、または統一的な原理の一貫性が必要となるであろう。いいかえれば、これら二つの学問領域、すなわち物理と心理の間に、物理法則と方法によって心理を解釈できるというような『開題門』においてすでに現われた統一性が、要求されるのである。このような統一科学のための理論的要求は、『百学連環』ではまだ出てきていない。それが出てくるのは、明治四年～六年の『生性発蘊』においてである。そこで、次節において『生性発蘊』を中心とした西の統一科学の理論的要請

がどのようなものか、そしてその要請が満たされるようなものかどうか、そしてこの要請が物理と心理の区別に対してどのように反映するかなどを考えていくことにしよう。

4. 統一科学の構想 (3)——『生性発蘊』の試み——

さて、『生性発蘊』は、『百学連環』から一、三年経た明治四年ないし六年ごろに執筆されたものであるが、⁸³⁾出版されたものではなく、原稿のままの形で残されたものである。しかし、この著作は、西の統一科学の原理的な問題を取り扱おうとしている点で劃期的なものである。ところで、『生性発蘊』の「生性」とは、西のいうところによれば、孟子の告子章句上にある告子の言、すなわち「告子曰く、生これを性という」から引用されたことばである。告子の意味した「性」とは「生」すなわち生まれつきの生物学的生理学的特性を指すものであったが、西の「生性」は、一部分告子の意味を取り入れながら、かなり違った意味を含ませているように思われる。すなわち西のいう「生」は、告子と同じく生まれつきの生物学的、生理学的人間性を指し、またその固有の法則を指すのであるが、「性」とは、^{サイコロジ 86)}「性理ノ学」という用語で使われるように、前者が「物理」であるのに対して、「心理」を表わすものであるように思われる。つまり、「生性」とは、^{サイコロジ}生理学と^{フィジオロジ}性理学を意味するように思われる。

ところで、生理学は物理学から化学、生物学をつらねた物理の世界の最終領域の生理を対象とする学である。これに対して、^{サイコロジ}性理学は、物理の世界を離れた心理の世界の現象を対象とする学である。そこで、生理学と性理学とには、物理と心理との間の隔たりに対応する隔たりが横わっている。西は、『百学連環』と『生性発蘊』において諸科学の間の「統一ノ観」を立てることを目標にしたのであるが、とくに『生性発蘊』においては、物理を土台として心理を解明していくという目標を立て、これを追究しようとしたのである。すなわち、

「格物ヨリ，化学ニ至リ，化学ヨリ，生体学ニ至ルヲナレハ，^{フィジカル}物理ニ本
イテ，性理ヲ開クヲナルハ^{シル}著ク，格物化学ノ成功ニ依テ，^{アナトミー・フィシオロジー}解剖生理ノ
学ヲ開キ，解剖生理ノ余功ニ頼テ，性理ノ⁸⁷⁾蘊奥ヲ開ク」

を目標にしたのであった。

ところで，西は，すでに物理学から生理学までは統一の見解を立てること
に成功していると考えた。しかし生理学と^{サイコロジー}性理学との間には，生理学的
原理によって^{ミソ}性理学的現象を解釈できないような「溝」が横たわっていた。
そこで，もしこの溝をこえがたいものと認めるならば，^{フィジオロジー}生理学と^{サイコロジー}性理学，
生理と性理との二元論を認めることになる。西は，この二元論から精神を
肉体から遊離させた空理が生まれてくると考えたのである。したがって，
西は、『生性発蘊』のなかでこの生理と性理の間の橋渡しを作り，しかも
生理にもとづいて性理を開こうとする実理哲学を建設しようとしたのであ
った。すなわち，

「格物物理学ヨリ，生理ニ至ルマテハ，^{タト}縦ヒ，無機性体ト，有機性体
トヲ，劃スル一大鴻溝ナリト雖モ，既ニ，大船橋ヲ架シテ，往来自在ナリ
ト謂フヘシ，唯生理ヨリ性理ニ渡ルハ，橋梁未タ架セス，船舸未タ備ハラ
ス，茫然トシテ，津涯無カ如シ……既ニ従来ノ^{マテリアル}哲学ニテ，^{インマテリアル}実質，非実ノ説
アリテ，渡航ス可ラサルノ，海險トスル耳ナラス，全然タル，別乾坤ナリ
トセリ，是超理家ノ^{タト}抛テ以テ，高妙無根ノ説ヲ，培養スルノ地ナリ，故
ニ，五学ノ連鎖，唯此処ニ於テ，一欠両断トナルヲ見ル，苟モ，此処タニ，
百鍊ノ鉄ヲ以テ，其環ヲ補フ時ハ，上ミ天文ヨリ，下人事ニ至ルマテ，一
聯理，一脈絡，左右其源ニ逢テ，統一ノ觀，立タサルヲ患ヘサル也，是所
謂ル要旨ニシテ，即チ性理ノ学，非質ノ見解ヲ脱シ，実質ノ理法ニ本ツ
キ，生理ニ抛リ，性理ヲ開キ，以テ夫ノ人間学ノ蘊奥ヲ括リ，其源ヲ，爰
ニ⁸⁸⁾発スルヲ得ヘキ也。」

したがって，西は，「生理」により「性理」を開き，人間学の「蘊奥」を
きわめて，その「源」を「発」することを目標として，本書を『生性発蘊』

と名づけたものである。

それでは、この統一科学の基本的な作業である生理と性理の橋渡しをどのように仕上げようというのであろうか。西は、この点についてつぎのようにいう。

「今余カ宗トシ本ツク所ハ、漢土ノ儒家、天竺ノ禅家ナトニ、抛ラサルハ論ナク、此超理学^{メタフィジックス} 物質学^{マテリアリスム}諸家ノ説トモ、其根柢スル所、全然別ナル者ニシテ、法ノアウグスト・コントガ実理学^{ポジチビズム}ニ溯源シ、近日有名ノ大家、英ノジョン・スチワルト・ミルガ帰納致知^{インダクチャー}ノ方法^{メトード}ニ本イテ、始メナント思フナリ。」⁸⁹⁾

しかしコントとミルに頼りながら、西が自分で生理と性理の間の橋渡しをするには、自分の力量不足を痛感したにちがいない。そこで、西は、すでにふれたように『生性発蘊』の前半を、G・H・ルイスの『哲学史』⁹⁰⁾のコント哲学紹介部分の翻訳で埋め、後半を、同じくルイスの『コントの科学哲学』の十六章から二十一章までの翻訳で埋めた。

しかしなぜ西が未完成のまま、『生性発蘊』の筆を折らねばならなかったのであろうか。それにはいろいろ理由があろうが、その一つの理由としてルイスのコント紹介のなかには、西の期待したような生理と性理とを橋渡しできる原理が発見されなかったことを挙げてよいし、またとくに『コントの科学哲学』のなかの西が翻訳した箇所に、コントの統一科学の構想に対するミルの有効な批判が発見されたことを挙げてよいように思われる。そこで、まずここで展開されたミルのコント批判を検討してみることにとしよう。

さて、ミルは、一応コントに従って心理法則が動物の生命法則（生物学的生理学的法則）から出てくる派生法則であるかもしれないという可能性を認め、その範囲で、心理法則が物理条件に依存しうることを認めてはいらる。しかしこういう可能性を認めるからといって、生理と性理の間の橋渡しができあがったと結論してはならないと考えた。むしろ心理状態の直接

原因として神経状態があることをたとえ認めたとしても、われわれは、神経状態の特性についてもまったく無知であるから、特定の神経状態を他の状態から識別することができない。それらを識別するためには、われわれは、神経状態の結果とみられる心理状態の^{サクセション} 継起と^{コエグジステンス} 共在を観察して、心理状態を識別したのち、ぎゃくに推論して、神経状態を識別するほかない。いいかえれば、心理現象の間にある継起は、神経機構の生理学的法則から演繹するわけにいかないのであり、むしろ神経機構の生理学的法則を知るには、心理的継起を観察し実験してみなければならぬというのである。

したがって、ミルによれば、心理現象は、心理現象として研究されねばならず、より一般的な現象法則（生理学的法則）から推論しえないものであり、それゆえ、心理学を生理学と独立に設けなければならないとしたのである。⁹¹⁾

このミルの反論に対して註解者のルイスは、「美爾ノ論ノ如キ、真ニ肯啓ヲ得ル者ト、謂フヘシ、而テ余以謂ヘラク、^{コント} 坤度ノ持論モ、亦却テ然ルヲアル者ナリ」と同調し、⁹²⁾ コントもミルに賛成するものであることを強調した。たしかにすでにふれたように、コントが主観的方法を主体とし客観的方法を従とした心理学研究を提唱したとき、コントはミルとこの点において同一線上に立つものといえよう。

しかし西は、このミルの批判とルイスの賛同を翻訳してみたとき、コントが志そうとしていた生理から性理にいたる一貫性が絶たれたこと、すなわち「実質ノ理法ニ本ツキ、生理ニヨリ、⁹³⁾ 性理ヲ開ク」という統一科学の糸がふつつりと切れてしまったことを感じたにちがいない。そこで、西は、このあとルイスの『性理学^{ニムセレブラル・テオリ} 新説』一章を翻訳しただけで、『生性発蘊』の完成を断念したように思われる。

このようにして一方で西は、『百学連環』と『生性発蘊』をとおして、生理から心理への橋渡しが絶望的なまでに困難であることを感じながら、

しかもその橋渡しをなお模索しつつけるとともに、他方で西は、ミルにしたがってしだいにふたたび生理と性理とを、区別していくこと、すなわち物理と心理を区別していくという『百一新論』の見解に戻っていくようになった。

たとえば、明治七年に出た『知説』には、百学の分類について一応物理と心理の学を分類してつぎのようにいっているのである。すなわち、

「今凡百學術ヲ類次シテ之カ要旨ヲ示サムト欲スルニ方リ、之カ大綱ヲ別タサレハ着手ノ工夫ヲ欠クヲ以テ、今姑ラク之ヲ別チテ三大綱トナス、曰ク普通ノ學術、曰ク物理ノ學術、曰ク心理ノ學術……」⁹⁸⁾と。

したがって明治七年には西は、物理と心理とを区別して統一科学を立てようとしていたことが知られる。またかれは、明治十五年に出した『尚白劄記』にはつぎのようにいっている。

「凡ソ百科の學術に於ては統一の觀有る事緊要なる可し、學術上に於て統一の觀立ては人間の事業も緒に就き、社会の秩序も自ら定まるに至る可⁹⁵⁾し。」

このように説いて西は、さらに生理と心理の関係については、「然れども余は未タ其生理と性理との相連結するの理趣を講明して発見し得るの力に乏しければ、姑く心理と物理とを兩種と為して之を説き、唯事業上に就きて其統轄隸属する關係を説かんと為⁹⁵⁾」と述べている。この事は、西が『生性発蘊』で達した統一科学の挫折の状態を明治十五年においても脱していないことを示している。

さて、以上に述べてきたように、西は、コント・ミルに従って諸科学の統一、すなわち統一科学を打ち立てようと試みてきたが、けっきょく生理と心理の間の「環」を見いだそうと見いだすことができず、挫折してしまつたのである、したがって、西の立てた統一科学は、『尚白劄記』にいわれたような學術、物理の學術、心理の學術という三綱目のカテゴリによって立てざるをえなくなり、物理によって物理と心理をつなぐ唯物論的統一科

学の試みは未完成のまま終わってしまったのであった。(尚、当論文の作成のために、昭和44年度慶應義塾学事振興資金の一部を使わせて頂いた。)

註

- 1) 大久保利謙編『西周全集 一卷』, 宗高書房, 昭和三十七年『徂徠学への志向を述べたる文』p. 5. 以下、『徂徠学への志向』と略す。
- 2) 同書 p. 5
- 3) 阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東大出版, 昭和四十年, pp. 497-498.
- 4) 荻生徂徠『弁名下』日本倫理彙編, 六卷, 明治四十四年, 千代田書房 p. 105.
- 5) 同書 p. 79, p. 81, p. 99.
- 6) 同書 p. 79.
- 7) 同書 p. 109.
- 8) 荻生徂徠『弁道』日本倫理彙編, 六卷, p. 22.
- 9) 『弁名下』p. 116.
- 10) 西周『徂徠学への志向』p. 5.
- 11) 西周『開題門』『西周全集 一卷』, pp. 19-20.
- 12) 朱子・呂子編『道体類』『近思録』漢籍国字解全書 八卷, 早大出版, 明治四十三年 p. 40.
- 13) 島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書, 昭和四十二年 p. 93.
- 14) 朱子・呂子編『克己類』『近思録』pp. 220-221.
- 15) 『為学類』『近思録』p. 49.
- 16) 荻生徂徠『弁名下』p. 89.
- 17) 同書 p. 89.
- 18) 『開題門』p. 28.
- 19) 同書 p. 20.
- 20) 『全集』一卷, 大久保利謙氏「解説」pp. 635-637.
- 21) 西周『百一新論』『西周全集 一卷』, p. 236.
- 22) 同書 pp. 261-264.
- 23) 同書 pp. 265-266.
- 24) 同書 p. 274.
- 25) 同書 p. 276.
- 26) 同書 p. 234.
- 27) 同書 p. 289.
- 28) 同書 p. 277.

- 29) 西周『百学連環』『西周全集 一卷』日本評論社，昭和二十年，p. 14.
- 30) 『百一新論』p. 288.
- 31) 同書 pp. 288-289.
- 32) 『百学連環』p. 11.
- なお西周が『百学連環』において“Encyclopedia”という語を用い、とくに「英国の」という形容詞をつけたことは、英国で出版された当時のいわゆる『ちやんぶるの百科全書』を西が連想していたのではないかとみられるふしがある。この『百科全書』は、William Chambers 兄弟が 1833 年ごろに“Chamber’s Educational Course”として出版し、のちに“Chamber’s Information for the People”と題名を変え、最後には 1859 年から、“Chamber’s Encyclopedia”となって、1868 年に完結したチェーンバース百科全書のことである。とくに第二の“Information for the People”版は、福沢諭吉の『西洋事情外篇』にも翻案されて、日本に大きな影響を与え、さらに、明治六年から、西村茂樹、箕作麟祥を中心として文部省において翻訳刊行されたものである。これらの事情については、故福鎌達夫氏著『明治初期百科全書の研究』風間書房，昭和四十三年に詳しいので、参照されたい。
- 33) George Henry Lewes, Comte’s Philosophy of the Sciences, London, George Bell and Sons, 1853, (1897), p. 48.
- 34) 『西周全集 一卷』宗高書房，解説，pp. 618-619.
- 35) George Lewes, The Biographical History of Philosophy, 1857 (Longmans, Green, and Co., 1871).
- 36) G. H. Lewes, Comte’s Philosophy of the Sciences, London, George Bell and Sons, 1853 (1897).
- 37) 『百学連環』p. 11.
- 38) 同書 p. 35.
- 39) 同書 p. 13.
- 40) 西周『知説』『全集 一卷』宗高書房，p. 459.
- 41) William Hamilton, Lectures on Metaphysics and Logic, Vol. I, William Blackwood and Sons, Londons, 1859-60 (1870-1874), pp. 6-12; pp. 20-62; pp. 113-118.
- 42) G. H. Lewes, Comte’s Philosophy of the Sciences, pp. 65-66.
- 43) 『百学連環』p. 15.
- 44) W. Hamilton, Lectures on Metaphysics and Logic, Vol. I, pp. 115-116.

西周による統一科学の試み

- 45) アリストテレス『ニコマコス倫理学』1140 b.
- 46) 『百学連環』p. 13.
- 47) 同書 p. 14.
- 48) 同書 p. 15.
- 49) 同書 p. 35.
- 50) 同書 p. 19.
- 51) G. H. Lewes, Comte's Philosophy of the Sciences, p. 42.
- 52) 『百学連環』pp. 30-31.
- 53) 同書 p. 23.
- 54) 同書 p. 23.
- 55) 西周『致知啓蒙』『全集 一卷』宗高書房, p. 450.
- 56) 『百学連環』p. 25.
- 57) 同書 pp. 28-30.
- 58) J. S. Mill, A. System of Logic, 1843, (Harpers & Brothers, New York, 1881), pp. 280-285.
- 59) 『致知啓蒙』p. 450.
- 60) 同書 p. 450, ミルの帰納法には, 上に述べた五種が挙げられる. 一致法は, すでに述べたとおりである. 差異法は, 多数の現象のなかで, 一致する結果 R_1 を生み出す現象の条件 C_1 があるとする場合に, この条件 C_1 を含まない現象の条件群が, R_1 と違う結果 R_2 を生み出すとすれば, この条件 C_1 は, 結果 R_1 の原因の一つとなるとみなす方法である. したがって, 西が「陽効表」, 「陰効表」と呼んだものは, これらの $C_1 \rightarrow R_1$ と $\sim C_1 \cdot C' \rightarrow R_2$ をそれぞれ指しているともみることができる. ミルは, “Positive instances” と “Negative instances (A System of Logic, p. 285)” と呼んでいるが, 西は, これらを “Positive Result,” “Negative Result” と呼んだ点, すこし違っている.

また一致・差異共用法は, 一致法と差異法を同時に使用して, 因果関係を明らかにする法である. 剰余法は, 諸条件 ABC が現象 abc を引き起すものと考えられるとき, すでにわれわれが B が b をもたらし, C が c をもたらすことを知っている場合, $A \rightarrow a$ という因果関係が成立するであろうと推定することである.

共変法とは, ある状況で余計な条件を除去していくことができない場合に, 使われる方法である. すなわち, 一現象がある変化をすると, それに応じて他の現象が同じ仕方で変化していくとすれば, これらの現象の間に, なんら

かの因果関係があると推定する方法である。これらのミルの帰納法は、上に述べたように部分的にしか西によってふれられていない。

- 61) 『百学連環』 p. 235.
- 62) 太宰春台『経済録』日本経済大典 第九卷. p. 400.
- 63) 同書 pp. 400-401.
- 64) 同書 p. 401.
- 65) 矢野祐利, 野村兼太郎『明治文化史, 学術篇』五卷, 洋々社, 昭和三十年, pp. 467-468.
- 66) 『百一新論』 p. 277.
- 67) 同書 p. 278.
- 68) 同書 p. 278.
- 69) 同書 p. 278.
- 70) 同書 p. 281.
- 71) 同書 p. 282.
- 72) 同書 p. 280.
- 73) 同書 p. 277.
- 74) 同書 p. 278.
- 75) 小泉 仰『明治初期の倫理思想研究のための序論——西周の場合 (3)——』慶大商学部日吉論文集 4, 昭和41年9月.
- 76) 『百一新論』 p. 282.
- 77) 『百学連環』 p. 36.
- 78) 同書 p. 37.
- 79) 同書 p. 37.
- 80) G. H. Lewes, Comte's Philosophy of the Sciences, p. 216.
- 81) Franz Josef Gall, 1758-1828, ドイツ生れの生理学者, 骨相学の創始者.
- 82) G. H. Lewes, Comte's Philosophy of the Sciences, pp. 215-217.
- 83) 『百学連環』 p. 260. なおこのコントの主観, 客観の方法上の区別は, 西の用語としては, 『生性発蘊』では「此観」と「彼観」の方法として訳されている(同書 p. 115). さらに明治八~九年に訳された『ヘヴン氏心理学』では, ふたたび「主観」「客観」に戻っている.
- 84) 『西周全集 一卷』宗高書房, p. 617.
- 85) 『生性発蘊』『西周全集 一卷』宗高書房, p. 30.
- 86) 同書 p. 64.
- 87) 同書 pp. 64-65.

- 88) 同書 p. 36.
89) G. H. Lewes, *Biographical History of Philosophy, 1845-1846* (Longmans, Green, and Co., 1871)
90) G. H. Lewes, *Comte's Philosophy of the Sciences*, pp. 210-211; J. S. Mill, *August Comte and Positivism, 1865*, (London, George Routledge and Sons, 1865), pp. 63-67.
 西周『生性発蘊』pp. 106-107.
91) 同書 p. 108.
92) 同書 p. 65.
93) 西周『知説』『全集 一卷』p. 462.
94) 西周『尚白劄記』『全集 一卷』p. 165.
95) 同書 p. 167.

Nishi Amane's Attempt at Unified Science

Takashi Koizumi

Résumé

I have tried in this paper to clarify Nishi Amane's attempt at unified science in the early Meiji Era. The article consists of four parts: 1) Nishi's cultural background for unified science; 2) Nishi's attempt at unified science in the "Hyakuichishinron;" 3) Nishi's attempt at unified science in the "Hyakugakurenkan;" 4) Nishi's attempt at unified science in the "Seiseihatsuun."

In the first part, we deal with Nishi's cultural background before he was confronted with European philosophy. We find that Nishi's studies of Chu Hsi's and Ogyu Sorai's philosophy, together with his medical training, provided the appropriate foundations for his unified science. In the second part, we concern Nishi's attempt at unified science in the "Hyakuichishinron (1866-67)" and find confucianistic influences in his attempt, together with Auguste Comte's and J. S. Mill's. In the third part, we discuss his attempt at unified science in

the “Hyakugakurenkan (1870)” and deal with his principles on which he tried to build up his system of unified science. In the fourth part, we examine his attempt to bridge over the gap between physiology and psychology in the “Seiseihatsuun (1871-73).” This gap was considered to be an insurmountable one between mental and physical sciences in those days. We discuss Nishi’s attempt at construction of a bridge over this gap and deal with his frustration in this attempt.